

「菩薩」とは「ボーディサットヴァ」という、インドの言葉がもとになっています。それに「菩提薩埵<sup>ぼだいさつた</sup>」という字を当て、さらに略したものが「菩薩<sup>ほさつ</sup>」です。

「ボーディサットヴァ」とは、「さとりを求める人」という意味で、初期の仏教では、さとりを開かれる前のお釈迦さまのことを意味しました。

お釈迦さまが亡くなられてから約五百年後に、大<sup>だいじょう</sup>乗<sup>おこ</sup>仏教が興ります。

それまでの仏教が自分自身のさとりを重視したのに対し、大乘仏教は人々の救済に重点を置きました。さとりは人々を救う行いによって得られるとしたのです。

「大きな乗り物」に多くの人びとを乗せるという意味の「大乘」という言葉は、その特質をよくあらわしています。

この大乘仏教において「菩薩」は、大きな変化をとげました。

人々を救い、さとりを求める者すべてを「菩薩」としたのです。もとは、「さとりを求める者」としてのお釈迦さまを意味していた「菩薩」の範囲が、大きく広がったわけです。さらに、「さとりを求める者」というもともとの意味に、「さとりをそなえる者」という意味が加えられていきます。

「さとりをそなえる者」であるならば「如来<sup>にょらい</sup>」、つまり、さとった仏様と同じではないか？という疑問が出てくると思います。

しかし、「菩薩」は「如来」と少しちがうのです。

さとりを開く力量<sup>えん</sup>と縁<sup>じゆく</sup>とが十分に熟しているにもかかわらず、あえて人々の側に身を置き、他者<sup>たしや</sup>を救う行<sup>ぎょう</sup>をつとめる。これこそが「菩薩」の理想の形である、とされたのです。

その理想の形として生まれたのが、さまざまな「菩薩」さまです。

「文殊菩薩<sup>もんじゆほさつ</sup>」「普賢菩薩<sup>ふげんほさつ</sup>」「観世音菩薩<sup>かんぜおんほさつ</sup>」「地藏菩薩<sup>じぞうほさつ</sup>」などがそうです。

これら「菩薩」の仏像と、「釈迦如来」や「薬師如来」などの「如来」の仏像を思い起こしてみてください。

「如来」の像にはなくて「菩薩」の像にあるものは何でしょうか。

如来像<sup>にょらいぞう</sup>の多くは、衣<sup>ころも</sup>を着けているのみで、装身具などは身につけていませんが、菩薩像<sup>ほさつぞう</sup>の多くは、冠<sup>かんむり</sup>などをかぶり、装身具を身につけ、さまざまな持ちものを持っています。

これは、人々と同じ装<sup>よそお</sup>い<sup>たしや</sup>をすることで、「あえて人々の側に身を置き、他者を救

う<sup>ぎょう</sup>行をつとめる」という「菩薩」のころをあらわしているといえるのではない  
でしょうか？

観音さまや、文殊さまなどの仏像をご覧になることがありましたら、どうか、こ  
の菩薩のころを思い出してください。

私たち一人ひとりの行いが、さとりを求め人々を救おうとする「菩薩」の行いに  
近づくこと。それこそが、菩薩さまたちが私たちに願っていることなのです。

— 終 —